こどもの「けいれん」について

子供の時に一度でもけいれん（ひきつけ）を起こしたことのある人は、全体の１割前後います。ほとんどは、いわゆる「熱性けいれん」といわれ、急激に発熱した時に起こりやすいものです。これは乳幼児期（６カ月～４才）の脳の未熟性によるもので、短時間で止まりますし、後遺症はまず起こりません。ただし、なかには重症な病気（髄膜炎、脳炎など）によっておこる場合もありますので、早めに小児科で診察を受け、診断してもらわなければいけません。

突然けいれん（ひきつけ）を起こしますと、どうしても動揺し、何をしてよいか分からなくなると思いますが、落ちついて下さい。けいれんだけで命をおとすことはまずありません。

子供がひきつけた時の注意点は

①まずあおむけに寝かせ、衣類をゆるめる。
②口の中にハシやスプーンをつっこまない（歯を折ったり、窒息をおこす原因となる）
③吐き気があったり、吐きそうな時には顔を横に向ける。
④落ちついてひきつけの状態を観察する。
⑤ひきつけが治まった後は、安静にし、意識が戻ることを確認する。
⑥次の場合は救急車でも結構ですから、当院を受診して下さい。

＊しばらく観察していても止まりそうにない場合（約５分間以上）
＊止まった後も意識が戻らない時、あるいは再びひきつけた場合
＊左右の手足のひきつけ方が違う場合

ひきつけの観察のポイントは

①固くつっぱっていたか、それともグタッとなっていたか。
②呼びかけに対して反応がなかったか。
③眼がどちらの方向を向いていたか。固定していたか。
④顔色や爪の色が青黒くなったかどうか。
⑤左右の手足の引きつけ方に差がなかったかどうか。
⑥熱はあったか。
⑦ひきつけの時間。

なお、熱がなくてひきつけた場合には、「てんかん」などの病気の可能性がありますので、早めに脳波などの検査を受けましょう。当院に御相談下さい。